

聖書：ローマ 15：14～21

説教題：神から恵みをいただいて

日時：2016年9月4日（朝拝）

ローマ書は本論を終えて、今日の箇所から結びの部分となります。パウロはまず読者への信頼と尊敬の言葉を述べます。14節：「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」パウロはこれまで色々語って来ました。15節では「所々、かなり大胆に書いた」とも言っています。しかしそれは決してあなたがたがまだ理解していないからとか、自分たちで解決できないからと思って書いたわけではないと言います。むしろあなたがた自身が互いを思いやり、教え合うことができると確信していると言います。ここに他の手紙にも見られる彼の読者への深い心配りが示されています。私たちはここから改めて誰かに何かを忠告する場合、ただそれだけを言うべきではないということをお知らせされます。お願いされたわけではない忠告やアドバイスは、それだけでは相手への批判になってしまいます。言われた人は自分の全存在が否定されたと思ってしまいます。しかし問題点ばかりを述べるのではなく、相手の良い点も見出し、それを認め、賞賛する言葉が含まれているなら、その人は本当に私のことを思って、愛の心によって、そのことを語ってくれていると分かります。そうする時に、そのアドバイスは一層効果的になるでしょう。もちろんパウロは単なるおべっかを使ったわけではありません。彼はローマの教会を訪れたことはありませんでしたが、プリスキラとアクラ夫妻を通して、あるいは世界の中心地ローマを行ったり来たりする人々から、この地の教会のことを聞いていたのでしょう。それをもとにして彼らへの尊敬や信頼の言葉を忘れないパウロの姿がここにあります。

しかし自分たちで解決できるはずの彼らなら、なぜパウロはこれまでのことを書いて来たのでしょうか。パウロはそのことを、神から与えられた召命との関係で述べています。すなわち「異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となる」ということです。

今日一つ目に注目したいことは、パウロはこの異邦人のための働きを16節で「恵み」と表現していることです。恵みとは何でしょうか。恵みとは「受けるに値しない者に与えられる神の愛顧のこと」と言われます。私たちの救いはまさにこの「恵み」によりました。3章23～24節：「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることが

できず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」 エペソ書2章8節：「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」

しかし16節の「恵み」という言葉は、今見たような「救いの恵み」のことではありません。この恵みは、救いの恵みに加えてさらにパウロに与えられた召命に関するものです。彼はすでに1章5節で「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました」と言っていました。すなわちパウロは自分が受けた使徒の務めを指して「恵み」と言い表していました。彼は以前は教会を迫害し、イエス・キリストご自身に反逆して来た者でした。取り返しのつかないような大変な罪を犯して来た者でした。ところがその彼は恵みによって救いの内に入れられたばかりか、神のために働くというさらなる「恵み」もいただいた。お前は恵みによって救いには入れてやるから、後は端っこで静かにしていなさい！ではなく、神の国が建て上げられ、完成することに向かったの尊い使命、働きをも授けてくださった。パウロはその自分が受けた召命を大いなる「恵み」と呼び、これについて神に深く感謝せずにいられなかったのです。

その彼が頂いた恵みは具体的にどういうものだったのでしょうか。それが「異邦人のためにキリストに仕える」ということでした。異邦人が聖なるものとされて、神に受け入れられる供え物となることです。彼は16節でこの働きを「祭司の務め」と呼んでいます。すなわち祭司として異邦人を神にささげるのです。もちろんこれは異邦人をいけにえにしてささげるという意味ではありません。これは異邦人が神にふさわしいものとされ、神のものとなるようになること、すなわち彼らが救われるために仕えることです。そのための方法は、16節に「私は神の福音をもって」とありますように、福音を語ることです。御言葉を忠実に語ることによって、異邦人は御言葉に伴って働く聖霊によって聖められ、神に受け入れられるふさわしい者とされるのです。このような務めを「恵み」としてパウロは神から受けたのです。

二つ目に見るのは、この召命を受けてパウロはどのように歩んだか、どのように応答したかということです。17節に「それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。」とあります。パウロはこの働きが与えられたことを心から感謝していました。もちろんこれは簡単な仕事ではありません。使徒の働きを読めば、パウロがどんな多くの苦しみを経験したか、たくさん記されています。人

間的に考えれば、関わりたくないこと、できれば避けたいこととも言えるでしょう。しかしパウロは、私はこれに関して誇りを持っているのです！と言っています。この働きを「恵み」と考えているならそうなるでしょう。彼はこの召命に対して嫌々服従したのではなく、心からの喜びをもって、自らの最高の生きがいとして取り組んだのです。

しかし彼はこれを人間的な情熱と力で行なったのではありませんでした。彼がいかにキリストとの深い交わりの中で、これに当たっていたかは 18～19 節を読むと分かります。「私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。」 注意して読むと分かりますが、ここで述べられている働きの主語はキリストです。つまりこの働きはキリストの働きであるということです。パウロはそのために用いられる道具でしかありません。18 節の最初にありますように、「キリストが異邦人を従順にならせる」のです。この「従順」とは、1 章 5 節に「信仰の従順」と出て来ましたように「信仰が結ぶ実である従順」のことです。パウロはそのキリストがなし遂げたことしか私は話すつもりはないと言います。つまり彼の関心は、ただキリストがなさったことだけであり、自分の名誉とか業績といったことには全く関心がなかった。彼がいかにキリストにより頼み、キリストが下さる力によって、この働きに仕えていたかが分かります。18 節最後に「キリストは、ことばと行ないにより」とありますが、実際にこれを行なったのはパウロです。ただキリストが私に働いて事を導いてくださったので、パウロはキリストにすべてを帰しているのです。19 節も同じです。キリストがパウロを通してしるしと不思議なわざとを行なってくださいました。またそれは「御霊の力によった」と言われています。天上におられるキリストの働きは、この御霊を通してなされます。こうしてパウロは、召された働きをなすための力はキリストが与えてくださったことを証ししています。神は私たちに働きを与えるだけではないのです。キリストが共にいて、御霊の力によって、その働きができるように導いてくださるので

三つ目に見るのはこの結果、パウロの働きはどのように導かれたかということです。19 節後半に「エルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。」とあります。イルリコとは、ピリピやテサロニケの町があるマケドニヤ地方の西側の地域です。アドリヤ海を挟んでイタリア半島に面している地

方です。使徒の働きにはパウロがこの地方で伝道したという記録はありませんが、おそらくマケドニヤ地方を訪れた際、そこまで足を伸ばしたのでしょう。「エルサレムから始まって、ずっと回ってイルリコに至るまで」とありますように、パウロはイルリコまで一直線に進んだのではなく、周りの色々な地方を巡りながら進んだのです。これによって彼は当時のいわゆる地中海世界の東側半分を伝道したのです。超人的な働きです。

最後の 20～21 節には、パウロの宣教の原則が語られています。それは未伝地への伝道というものでした。キリストの御名がまだ語られていないところに福音を宣べ伝えるということです。これはもちろん、以後の教会が見ならうべき原則として示されているわけではありません。パウロは未伝地への伝道を志しましたが、当然、次の町へ移る時には、その場所に残って働きを継続する人が必要です。I コリント 3 章に「私が植え、アポロが水を注ぎました」とありますように、それぞれの働きは、それぞれに対する神の召命によって違ってきます。ただ異邦人への使徒として召されたパウロの原則はこうであったのです。このことにおいて、21 節にあるように、これまで福音を聞いたことのなかった人々がキリストを知り、悟るようになるというイザヤ書の預言が成就することになったとパウロは述べています。このような「異邦人の使徒」として召された者として、パウロはローマの教会のためにも心を砕いていたのです。その教会はパウロが行く前にすでに建てられていましたが、だからと言ってそういう教会には関わらないということではなく、異邦人主体の教会を励ますために、彼はこうして骨折っているのです。そしてやがてローマの教会を訪れたいと願っているのは、そこを拠点にしてさらに西の果ての伝道へと遣わされたいからだということが次回述べられることになります。

さて私たちは今日の箇所から自分に対してどのようなメッセージを受け取ることができるでしょうか。今日、見て来た「異邦人のための使徒」という召しは、もちろんパウロに独特なものです。しかし私たちもそれぞれ、パウロと同じように、救いの恵みだけではなく、さらなる「恵み」をいただいている者たちではないでしょうか。神の国のために、この働きを担って、その完成に貢献するようにと神から割り当てられていることがあるのではないのでしょうか。ある人は長老として、ある人は執事としての召しを受けているかもしれません。ある人は CS 教師として奉仕する務めを与えられているかもしれません。ある人は牧師、宣教師として召されているかもしれません。ある人は教会の中で様々な人々を励まし、慰め、助ける働きを与えられているかもしれません。またある人は社会における様々な働きに、またある人は家庭の中で、あるいは地域の中で、

主からの召しをいただいているかもしれません。召しは多種多様です。しかしいずれであれ大切なことは、私たちがそれを今日の箇所のパウロのように「恵み」としてもう一度捉えることではないでしょうか。救いの恵みを頂きつつ、あとの一生をただ自分の好きなように生きるということは本当はむなしいものです。やがての日に何も残らないことのために、ある意味で無駄に一生を費やすことだからです。しかし神は私たちを救ってくださったばかりでなく、永遠の天国が完成する時に向かって共に働くようにと召しをくださっています。このいつまでも価値が残る神の国の働きに共に労するようにと招かれていることは大いなる恵みではないでしょうか。ですから私たちは様々な御国のための奉仕を単なる義務とか、あるいは私が「やってあげること」と考えるのではなく、むしろ「させていただくこと」「させていただけること」と考えることが大切だと思います。もし私たちが「やってあげる」という感覚で考えていると、遅かれ早かれ文句が出て来るでしょう。なぜ私だけがこれをやらなければならないのか。なぜ私だけが労苦しなければならないのか。なぜ私だけがこうして仕えなければならないのか。他の人はずっと楽をしているようである、等々。しかしもしそれは「恵み」として私に与えられたものだと思える時、世界はガラッと変わって来ます。それは神の国の完成のための尊い働き、光栄な働きだと見えて来る。そして今日、私たちが改めて学んだことは、召しを与えた神は、それを成し遂げる力もキリストにあって与えてくださるということです。私たちは重い責任を負わされて一人さみしく犠牲的な奉仕をささげるのではないのです。キリストにより頼み、キリストとの交わりの中で、キリストに強められて、その道具として用いていただく喜びに生きるのです。神が私たちに与えてくださっている召しは何でしょうか。神は何を持って神の国のために働くようにと私たちを導いておられるのでしょうか。私たちはその自分に与えられている働きを改めて「恵み」として受け止め直したいと思います。そして私を用いてくださるキリストに信頼し、キリストとの交わりの中から、キリストの力によって、神の国の完成のために用いていただける特権と喜びに益々生かされて行きたいと思えます。